
なんでも屋 開店

ツナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも屋 開店

【Nコード】

N9107A

【作者名】

ツナ

【あらすじ】

なんでも屋を営む、かみや「つぎ」神矢聖希と水代みなしろかな華奈のお話です。

Mission / 1 ポチを搜索せよ！

「うん。 今月もやばいわね」

「ああ？ やばいって 前に金入ったばかりじゃねえか。 な
にに使ったんだよ華奈」

ある事務所でソファに腰かけている女の子、みなしろかな水代華奈とその向
かいのソファに寝転がりながらマンガを読んでいる男、かみやうつき神矢聖希が
話している。

「はあ？ あんたの今読んでいるその【ナマコ】とかいうワケのわか
らないマンガといま舐めてるチュッパチャップスの衝動買いのせいで
全部消えたわよ！」

「それはしょうがない。 自然現象だ。 我慢しろ」

「自然現象じゃないわよ。 あんたふざけてんじゃないわよ！ だ
いたいこのご時世に【なんでも屋】ってなによ！ 馬鹿じゃないの
？」

「うるせえな。 この就職難の時代に仕事なんて選べるかよ。
それに俺はいまナマコを読んむのに夢中なんだ。 黙っててくれ」

「あんたねえ。 それより仕事来てなかったっけ？」

「ああ？ その辺に依頼用紙あるだろ」

聖希はめんどくさそうに机の上を指差す。

「依頼用紙って どうせただのメモじゃない。 あ、あった。」

「なんて書いてある？」

「えーっと、【黒猫のポチ】の搜索ね。」

「黒猫のポチ？ 猫か犬かどっちかにしろやな。 写真あるだろ？ 見せろよ」

「う、うん」

華奈は聖希に【黒猫のポチ】の写真を渡した。

「こ、これは 黒猫っていうより黒豚だな よっぼいいもん食わせてもらっただなコイツ」

「それより早くしないと！ 今日の午後5時は飼い主が来るらしいわ」

「なにいい！？ それを早く言ええ！」

今の時刻は午後の2時。 3時間で一匹の猫（？）を探すのは至難の技だ。

「よし、行くぞ！」

「で、どの辺にいるかわかってんの？」

「知らん。 片っ端から探す！」

聖希はなぜか自信満々で出ていった。

「はあ」

不安そうな華奈もそれに続く。

「華奈〜。 見つけたか〜？」

「まだよ。 どこにいるのかしら」

聖希、華奈は携帯電話で連絡を取り合いながら猫を探していた。

「あと2時間ね」

「もう1時間たったのか。 やばいな〜。 この依頼ミスったら来週の名目買えねえよ」

「大丈夫よ。 買わせないから」

「それは無理だ。 嗚呼！ポチ発見！」

「え？ マジ？」

「おい！ すぐ来い！ じゃ」

「えっ？ あんたど ブツッ」

美奈はケータイをしまうとため息をつきながら聖希を探しはじめた

その頃、聖希は
猫を追い掛けていた。

「おるあああ！ 待ちやがれクソ猫がああ！」

「ニャー」

「ニャー。じゃねえよ！ おとなしく捕まれゴルア！」

「ニャー」

「おりゃああ！」

聖希は決死のダイビングキャッチを試みるがアッサリとかわされてしまった。

「マダマダダニャ」

ポチは得意気に聖希に向かって吐き捨てる。

「ぐっ なんて喋れんだコイツは 」

「ニャ？」

不意にポチの体が浮いた。 いや、持ち上げられた。

「お待たせ」

「チツ　　遅せえよ華奈」

「聖希がちゃんとした場所言わないから結構探しちゃったわよ」

「そうか。　まあそんなことはどうでもいい。　帰るぞ」

「うん」

【なんでも屋事務所】

「でもこれで報酬手に入るね」

「ニヤー！　ニヤー！」

「そうだな。　って暴れるな豚！」

「キシヤー」

「ぎゃあああ！？　ひっかくなデメエ！」

「クスクス」

時刻は4時50分。 なんとか約束の時間に間に合った。

ピンポン

「お？ 依頼人かな？」

「あたし出るわ。 ポチ押さえといてね」

「イエッサー」

華奈は玄関へ行き、ドアを開けた。

「こんにちは。 先日依頼した者ですけど」

そこにはスーツを着た女性が立っていた。 年は聖希や華奈より
少し上ぐらいか

「お待ちしております。 こちらへどうぞ」

「はい。 あら、神矢さん。 どうも」

「ああ、染井さん。 今日はどうしたんスか？」

「やだわあ、ポチの搜索頼んだの私ですよ」

「そうだったっけな？ じゃあこの豚早く連れてってくださいよ。
ひっかきまくりなんだもんなコイツ」

「豚じゃなくて猫なんですけどね 。 私のことはひっかかな

いのねえ、このコは」

「そうなんスカ。それより捕まえるの結構大変だったんだから報酬はずんでくださいよぉ？」

「ふふっ、わかってるわよ。でも神矢さんでも大変だったなんて力使わなかったんですか？」

（力！？）

染井が不意に口にした『力』という言葉に華奈は少し驚いた

「そうそう使いませんよ」

「力ってなんのこと？」

華奈は聖希に問う。

「あれ？ 華奈には話してなかったつけなあ。俺の家系には代々受け継がれてきた力があるんだよ。【千里眼】って言うやつ」

「千里眼？」

「そ。なんでも神に許された力とかオヤジが言ってたな。」

「ふ、ふん。なんか信じられないわね」

「その力を使えば搜索なんて一発なのに。なんで使わないんですか？」

華奈の言葉を遮るように染井が言う。　それに華奈もうんうん、と賛同する

「アレは一回使うだけでも結構体力持ってかれるんですよ。」

「「そうなんだ」」

「それより報酬いくらくれるんスか？」

聖希の目が\$になっている。

「　　卑しいやつめ　　」

華奈は軽く聖希を睨んだ。　それに気付いたのか聖希が少しビクッ、とした。

「報酬は元の金額に1割り増してお渡しします」

「それは嬉しい！　これでナマコが買えるってもんよ！」

「まだアレ読んでるんですかあ？」

クスクス、と染井が笑う。

「いつものように読んでますよ。　聖希は」

華奈も染井と同様クスクスと笑う。

聖希は染井から報酬を受けとるとそそくさと事務所を出た

「？ 聖希のやつどこ行くんだろ まさか！？」

前回もそうだった。報酬を受けとったと思ったらそそくさと事務所を出て、帰ってきたと思ったらコンビニの袋一杯のチュッパチヤップスと週刊少年ナマコを持っていた。しかも報酬の半分は消えていたのだ。

（まさかのデジャビュ？）

「ただいまあゝ」

そこに見るからに上機嫌な顔の聖希が帰ってきた。手にはコンビニの袋がある 華奈は嫌な予感がした

「おかえり聖希。まさかその袋って」

「あれ？ 染井さん帰ったんだ」

「話をそらすってことはその袋の中身はチュッパチヤップスとナマコなのね」

「当然」

「はあ、もういいわ。のこりの報酬で久しぶりに外食でもしましょ」

「いや、それは 無理だな」

「？ なんでよ」

「見事に使いきった！ でも大丈夫！ チュッパチャップス500個買ってきてあるから」

「500個おお！？ 2万もチュッパチャップスなんかに使ったんかあんたは！」

「なんかとはなんだ！ なんかとは！ チュッパチャップスはなあ、神が与えし禁断の果実なんだぞ（意味不明）」

「禁断の果実つてのは食べちゃいけないから禁断の果実つて言うのよ！」

「そうなのか？ それは知らなかった」

「あんたねえ！」

そのあと数時間の間、事務所では言い合いが続いた
二人ともチュッパチャップスを舐めながら
なぜか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9107a/>

なんでも屋 開店

2010年10月10日03時26分発行